

智顛の二十五三昧について(一)

若 杉 見 龍

一

ここでいう二十五三昧とは法界二十五有を破する二十五の三昧という意味であるが、智顛の説述についてみるに、次の二箇処が挙げられる。その一は『法華玄義』巻第四上の迹門の十妙を述べる中、行妙を説く段で、別教の五種の行、即ち聖行・梵行・天行・嬰兒行・病行の次第行を明す箇処であり、その二は『四教義』（大部四教義・大本四教義）巻第十の別教の十地を明す段の中の初地即ち歡喜地を明す箇処である。

二十五三昧は『法華玄義』についていえば、聖行を戒・定・慧に分けて説く中の慧聖行の觀成じて行願等を具することを述べる中の第三段に説かれているのであるが、慧聖行の觀成の初段と、梵行等の他の四行を述べる箇処も『四教義』と深い関連があるように思われるので、二十五三昧と併せて両者を対比し、考察してみたい。それは文献としての『法華玄義』の成立に当っては、智顛親撰の『四教義』を重要な参考書としていることは既に先学によって指摘されているが、その『法華玄義』の天台教学に果たした役割等の究明はこれからの課題かと思われるからである。又因みに『法華玄義』の觀成の第二段、即ち五怖畏を離れる段については『四教義』にはこれに対応する記述は見当らない。これについては本稿の末で検討したい。

智顛の二十五三昧について(一)(若杉)

最初に『法華玄義』の慧聖行の觀成の初段と『四教義』の別教の初地即ち歡喜地を明す前段の部分とを比較対照してみよう。都合により上段に『四教義』下段に『法華玄義』を掲げる。

四教義卷第十(大正蔵四六卷)

P.755

下 初歡喜地名見道者。初發真中道見^①。性理。斷無明見惑。顯真^②。心一身。緣感即心百仞世界。現十法界身。入三世仏智地。能自利利他真大慶。故名歡喜地。大涅槃經云。菩薩聖行滿。即是住於無所畏地。即是初地。初地菩薩離五怖畏。無死畏。無不活畏。無惡道畏。無惡名畏。無大衆威德畏。涅槃經雖不作此名。義推屏同。若言不畏貪欲恚癡。內無三毒。外離八風。無惡名畏也。若言不畏地獄等。即無惡道畏。若言不畏沙門婆羅門。即無大衆畏。今既入無畏地。見中道則無二死。故言無死畏也。^③法身常命以顯無不活畏也。以得入此地故。則具二

妙法蓮華經玄義卷第四上(大正蔵三三卷)

P.721

中 修此慧時。即得住於無所畏地。即初歡喜地。離五怖畏。謂不活畏。惡名畏。死畏。惡道畏。大衆威德畏。大經云。不畏貪欲恚癡。此內無三毒外離八風。則無惡名畏。若言不畏地獄等。即無惡道畏。若言不畏沙門婆羅門。即無大衆畏。見中道則無二死畏。實相智慧常命立。無不活畏。得入此地具二十五三昧。破二十五有。顯二十五有我性。我性即實性。實性即仏性。^①開仏之知見發真中道。斷無明惑顯真^②。心一身。緣感即心百仞世界。現十法界身。入三世仏智地。能自利利他。真大慶名歡喜地也。此地具足四德。破二十五有煩惱名淨。破二十五有

P. 756 上十五三昧。破二十五有。顯二十五有之我性。我性即是実性。是名慧行成就。得五三昧即五行成就。

住於無畏之地。即得初地之名也。

業名我。不受二十五有報名業。無二十五有生死亡常。常業我淨。名為仏性顯。即此意也。

右の引用文中、直線を付した部分は両書のほぼ一致する部分、波線を付した部分は主旨は一致するものの、表現を異にする所、圏点を付した部分は相違する所である。以下同様である。引用文に①②③と数字を付した部分について検討してみよう。

①『四教義』では「初発_三真中道」。見_三仏性理_二。」とあるが、『法華玄義』では「開_三仏之知見_二発真中道」と表現を変え、又『四教義』では「断_三無明見惑_二。」となっているのに対し、『法華玄義』では「断_三無明惑_二。」となっている。これは右の『四教義』の引用の初めに「初歡喜地名見道者」と書き出しているように、『四教義』は別教の初地を大乘教の「見道位」二地から六地までを「修道位」七地以後を「無学道位」と名づけ、三藏教の行位の名目を利用してののに対し、『法華玄義』はかような名目をここでは使用していないからである。ただし、別教の初地を大乘の「見道位」と見立てる立場を『法華玄義』が全く捨てているかどうかは今後の検討に俟ちたい。

②『四教義』では「法身常命。以顯_三無不活畏_二。」と説くが、『法華玄義』では「実相智慧常命立。無_三不活畏_二」という。「法身」と「実相智慧」を同一にみているのであろう。

③『四教義』は「離五怖畏」を説明して、「無_三死畏。無_三不活畏。無_三惡道畏。無_三惡名畏_二。無_三大衆威徳畏_二」と述べているのに対し、『法華玄義』では「離五怖畏」を「謂_三不活畏。惡名畏。死畏。惡道畏。大衆威徳畏_二。」と説き「離_三五怖畏_二」の中の「五怖畏」の名目を挙げてゐる。これは恐らく『四教義』の如く、「無_三しと_二」説く

智願の二十五三昧について(一)(若杉)

智願の二十五三昧について(若杉)

に及ばないと考えたからであろうか。

三

次に二十五三昧を説く簡処を掲げ、これについて検討してみたいと思う。「四教義」の文は前掲文に続くのであるが、『法華文義』の文は前言したように、前掲文の次に『地持經』等を引いて、広く五怖畏を離れることを論ずる文段があるが、今はこれを除いて掲げる。

四教義卷第十(大正蔵四六卷)

P. 756

上 就此即為五意。一明得二十五三昧聖行成。二明梵

行。三明天行。四明嬰兒行。五明病行。一明得二

十五三昧聖行成者。即為三意。一積二十五三昧名。

二正修明二十五三昧成。三外用利物。一積二十五

三昧名者。略為四意。即是約四悉檀而立名也。一

者隨時趣立名。二隨便立名。三隨對治立名。四隨

理立名。一隨時立名者。譬如人有二十五子。隨時

名作一字。大者初生為作一字。次者後生。又作一

字。不可見大兒名。此亦令第二者名此。如是則不

P. 722

上 今積二十五三昧名。依四悉檀意。一隨時趣立。如

人多子各立一名。使兄弟不濫。二十五三昧亦復如

是。各舉一名令世誦不亂。豈可定執也。二隨其義

便。各從所以而立一名也。三隨事對當。各有主治

從對得名也。四理實無名而依理立字。雖有四意多

用對治。約理以立二十五三昧也。通積二十五。各

為四意。一出諸有過患。二明本法功德。三結行成

三昧。四慈悲破有。一一皆爾。

濫。此二十五名亦如是。各舉一名令世誦不亂。世間名字皆爾。不可求定實也。二者隨二十五有便而立名。若作余名事義非不便。是故隨便立名也。三者隨對治立二十五三昧名。各治一有用。是故對治立名。四者隨理立名者。此二十五三昧不出法性理。理合於義。從義而立名。名義雖異理實無別。約此四意故。得立二十五三昧名也。詳經文意。多有對治約理兩義。以立二十五三昧名。一正積二十五三昧修成者。一一三昧中皆有四意。一出諸有行業感障。二用三昧治破。三結成三昧。四慈悲破有。一一悉具此四意也。

②初明無垢三昧破地獄有。即為四意。一明業結者。罪之尤重莫若地獄。惡業垢重見思垢塵沙垢無明垢。二明用三昧破無明者。菩薩為破是諸垢故。中修前根本戒破惡業垢。修前八背捨等定伏見思垢。修有作無生等慧斷見思垢。修無量慧破塵沙垢。修

智顛の二十五三昧について(一)(若杉)

②地獄有用無垢三昧破者。地獄是重垢報處。報因則是垢。謂惡業垢見思垢。塵沙垢無明垢。其一菩薩先見此過。為破諸垢。修前來所明根本戒。破惡業垢。修前來所明背捨等定。伏見思垢。修前來所明生滅無生滅慧。破見思垢。修前來所明無量慧。破塵沙

無作慧破無明垢。三明結成三昧者。破見思垢故真諦三昧成。破惡業垢及塵沙垢故。俗諦三昧成。破無明垢故。中道第一義三昧成。四明慈悲利物。菩薩已自破地獄垢故得三諦三昧。有大慈悲冥薰法界。衆生有機闕於慈悲。以王三昧力。法性不動而能応之。如婆薮調達。応入地獄。隨其所宜。而為說法。破地獄有。如聖行品所明。自修戒定慧等諸行。故自証三諦三昧成。於聖行中有慈悲誓願。故破他三諦上垢。亦破他三諦上惡業煩惱垢。自既無垢令他無垢。故此三昧名無垢三昧也。因此下具此四意類前可知。

③次明不退三昧破畜生有者。畜生無慚無愧。起惡業故退失善道。見思故退失。塵沙故退。無明故退。

菩薩為破諸退故。修戒忍破惡業退。修定伏見思退。修生滅無生慧。破見思退。修無量慧破塵沙退。

修無作慧破無明退。見思破故位不退三昧成。塵沙

垢。修前來所明無作慧。破無明垢。其二破見思垢故。真諦三昧成。破惡業垢塵沙垢故俗諦三昧成。破無明垢故。中道王三昧成。其三菩薩自破地獄諸垢時。句句皆有慈悲誓願。冥熏法界。彼地獄有。若有機縁闕於慈悲。以王三昧力。法性不動而能応之。如婆薮調達。示所宜身說所宜法。彼地獄中若有善機。以持戒中慈悲応之。令離苦得樂。有入空機以生無生慧等慈悲応之。令得真諦。有入仮之機。以無量慧慈悲応之。令得俗諦。有入中機。以無作慧慈悲応之。令得王三昧。先自無垢今令他無垢故。此三昧名無垢也。下为例如此。不復委記也。

③畜生有。用不退三昧破者。畜生無慚愧退失善道。則是惡業故退。見思故退。塵沙故退。無明故退。菩薩為破諸退。修前持戒破惡業退。修於禪定伏見思退。修生無生慧破見思退。修無量慧破塵沙退。修

無作慧破無明退。見思破故得位不退。真諦三昧

破故行不退三昧成。無明破故念不退三昧成。自以修行力破三種退。成三不退。自得三諦三昧。慈悲之力冥熏法界。隨畜生有機感。或為象王啄鳥大鷲之身。隨其所宜而生其中。(原本は面)現為說法破畜生有。自既不退令他不退。故此三昧名不退三昧也。

④心樂三昧破餓鬼有者。餓鬼有常為慳惡業纏繞貪愛飢餓苦。見思煩惱苦。塵沙無知苦。無明暗弊苦。下菩薩為破是諸苦。修戒施。破慳惡業苦。修定伏見思苦。修生滅等慧破見思苦。修無量慧破塵沙苦。修無作慧破無明苦。破見思苦。真諦無為心樂三昧成。破慳惡業塵沙苦。俗諦分別多門心樂三昧成。破

智顛の二十五三昧について(若杉)

成。惡業塵沙破故得行不退。俗諦三昧成。無明破故得念不退。中道三昧成。本修諸行皆有慈悲誓願。冥熏法界彼畜生中。若有機緣關於慈悲。以王三昧力不動法性。而往心之。宣示何身宜說何法。為龍為象鷄鳥大鷲。若有善機。以戒定慈悲心之。令出苦得樂。有入空機。以生無生慧慈悲心之。令出有得無。真諦三昧成。有入假機。以無量慧慈悲心之。令免空得假俗諦三昧成。有入中機。以無作慧慈悲心之。令出入中。王三昧成。菩薩自既不退。令他不退。故名不退三昧也。

④餓鬼有。用心樂三昧破者。此有常弊餓渴惡業苦。見思煩惱苦。客塵障礙苦。無明根本苦。菩薩為破諸苦。修前持戒破惡業苦。修定伏見思苦。修生無生慧破見思苦。修無量慧破塵沙苦。修無作慧破無明苦。破見思苦。無為心樂三昧成。破惡業塵沙苦。下多聞分別樂三昧成。破無明苦。常樂三昧成。以

無明苦。中道常樂三昧成。以自修行証得三樂三諦三昧。以諸行中慈悲之力薰。現諸鬼形聲。施令得飽滿而為說法。令破三種苦得三種樂。菩薩自得此樂。又令他得樂。是故三昧名心樂三昧也。

⑤ 次歡喜三昧。破修羅有。修羅多忿恚惡業怖。見思怖。塵沙怖。無明怖。菩薩為破是諸怖故。持戒精進而修習諸行。不破歡喜破惡業怖。修禪悅喜伏見思怖。修生滅無生滅等慧得喜覺喜破見思怖。修照鏡喜及無量惠破塵沙怖。修無作慧破無明怖。見思破故真空喜悅三昧成。惡業塵沙破故。一切衆生喜見三昧成。無明破故喜王三昧成。以自修行力。得如此三諦歡喜三昧。以諸行中慈悲之力。薰修羅有而

下本行慈悲冥熏法界。彼餓鬼道。若有機緣與慈悲相闕。王三昧力不動法性而往庇之。示所宜身。說所宜法。若有善機。以持戒慈悲庇之。手出香乳。施令飽滿。有入空機。以生無生慈悲庇之。令到無為岸。有入假機。以無量慈悲庇之。令遊戲於五道。有入中機。以無作慈悲庇之。令淨於三毒根。成仏道無疑。菩薩自既得樂。又令他得樂。是故名為心樂三昧也。

⑤ 阿修羅有。用歡喜三昧者。修羅多猜疑怖畏。則有惡業疑怖。見思疑怖。塵沙疑怖。無明疑怖。菩薩為破是諸疑怖。而修諸行。修持於戒破惡業疑怖。修諸禪定伏見思怖。修生無生慧破見思怖。修無量慧。破塵沙怖。修無作慧破無明怖。見思破故空法喜三昧成。惡業塵沙破故。一切衆生喜見三昧成。無明破故。喜王三昧成。以本諸行慈悲誓願。冥熏法界。彼修羅中。若有機緣闕於慈悲。以王三昧力。

P. 757

生其中。軟語調伏而為說法。破修羅有令得無怖。自無三怖自証三喜。令他無怖。令他得歡喜。是故三昧名為歡喜三昧也。

⑥次日光三昧破非婆提有者。日初出於東隨便為名。

日譬智光能照迷闇。破惡業迷闇。見思塵沙迷闇。

無明迷闇。菩薩為照此諸迷闇故。修善業戒光。修

禪定流光。修生滅無生滅一切智光。修道種智光。

修一切種智光。明生闇滅。以善戒光破惡業闇。以

禪定光伏見思闇。以生滅無生滅光破見思闇。修無

量道種智光。破塵沙闇。修無作一切種智光破無明

上闇。破見思闇故。一切智日光三昧成。破塵沙闇故。

道種智日光三昧成。破無明闇故。一切種智日光三

昧成。以修行力。自証如是三諦三昧。以慈悲力薰

智願の二十五三昧について(若杉)

P. 723

不動法性而往応之。示所宜身說所宜法。有善機者。应以持戒身慈悲。令離惡業怖。有入空機。应以生無生慈悲。令離見思怖。有入假機。应以無量慈悲。令離無知怖。有入中機。应以無作慈悲令離無明怖。自証三喜令他無復三怖。是故名歡喜三昧。此前悉用对治立名也。

⑥非婆提有。用日光三昧破者日朝出於東。隨便為名

耳。日譬智光能照除迷惑。東天下人。有惡業闇。

見思闇。塵沙闇。無明闇。菩薩為照此諸闇故。修

上前戒光破惡業闇。修禪定流光。伏見思闇。修一切

智光。破見思闇。修道種智光。破塵沙闇。修一切

種智光。破無明闇。破見思闇故。一切智日光三昧

成。破塵沙闇故。道種智日光三昧成。無明闇破故。

一切種智日光三昧成。以本行慈悲誓願。冥熏法界。

彼非婆提。若有機緣関於慈悲。王三昧力。不動法

性。而往応之。示身說法。若有事善機以持戒慈悲

智頭の二十五三昧について(一)(若杉)

非婆提有。応現說法破其三迷。顯三諦智日故。此三昧名爲日光三昧也。

⑦ 次月光三昧破瞿耶尼有者。月之初生光現於西。此隨便立名也。月光亦譬破闇。積三昧四意。類日光三昧可知。

⑧ 次熱焰三昧破躡單越有者。北方是陰地。水結難消。自非熱焰終不消也。躡單越人。水執無我所。難可化度。非智火熱焰無我所心終不可消。破無我所。乃是妄計。無我我所理。實猶有性。人我之惑。有法我惑真如我惑。水滲未融也。菩薩爲破此諸我惑水執。修生滅等真無我慧。破性人我惑。修無量四諦慧。破法我惑。修無作四諦慧。破真如我惑。若得真人空智焰。破性人我惑。真諦三昧成。得真法空智焰。破法我惑。得俗諦三昧成。故能如空種躡樹。

(真本なし)

応之。令免惡業闇。有入空機。以生無生慈悲応之。令免見思闇。有入假機。以無量慈悲応之。令免無知闇。有入中機。以無作慈悲応之。令免無明闇。自既破闇亦令他破闇。故稱日光三昧也。

⑦ 瞿耶尼有。用月光三昧破者。月夕初現於西。亦隨便立名。月亦照闇例同日光。云云。

⑧ 躡單越。用熱焰三昧破者。北方是陰地水結難銷。自非熱焰赫照終不融冶。北天下人。水執無我難可化度。若非智火熱焰。無我所心終不得度。彼無我所。乃是妄計。猶有自性人我法我真如我。菩薩爲破諸我。修生滅無生滅慧。破性人我。修無量慧。破法我。修無作慧。破真如我。得入空成真諦智焰。得法空成俗諦智焰。得真如空成中道智焰。以本慈悲冥熏法界。彼躡單越。若有機緣。関於慈悲。以王三昧力。不動法性而往応之。示身說法。有善機。

空順俗以化物也。得真如無我智焰。破真如我惑。知非我非無我。是真我義。無我法中有真我。即見舊華越之我性。即有三昧成。心心寂滅也。菩薩自証三諦三昧。慈悲力故現舊華越形聲。破北方無我我所。令成真我三昧。故此三昧名為熱焰三昧也。

③ 次如幻三昧破閻浮提有者。南方果報雜。壽命短促不定。猶如幻化。此是心幻出生惡業果。幻出煩惱幻出無知。幻出無明。一切衆生不知如幻。今菩薩為破是諸幻故修三種三昧。修真諦三昧。幻出無漏。破見思之幻。修俗諦三昧。幻出道種智。破無知之幻。修中道三昧。幻出一切種智。破無明之幻。修行力故自証三諦三昧。成慈悲力故破他力成。是故名為如幻三昧也。

⑩ 次不動三昧。破四天王有者。此天守護國土。遊行世界身報流動。此則果報動。見思動無智動無明動。

智願の二十五三昧について(一) (若杉)

應以戒慈悲令免妄計無我。有入空機應以生無生慈悲令免性我。有入假機。應以無量慈悲令免法我。有入中機。以無作慈悲應之令免真如我。自破妄我下令他破妄我。故名熱焰三昧也。

④ 閻浮提有。用如幻三昧破者。南天下果報雜。壽命等不定。猶如幻化。此則從心幻出業。幻出見思。幻出無知。幻出無明。菩薩為破諸幻。從於持戒幻出無作。破結業幻。從於禪定幻出背捨。從生無生慧幻出無漏。從無量慧幻出有漏。從無作慧幻出非漏非無漏。見思幻破真諦幻成。無知幻破俗諦幻成。無明幻破中道幻成。故經言。如來是大幻師。彼閻浮提。有諸機緣關於誓願。以本慈悲隨感應之。自破諸幻成他諸幻。是故名為如幻三昧。余如上說。

⑩ 四天王有。用不動三昧破者。此天守護國土遊行世界。則有果報動見思塵沙無明等動。菩薩修諸行。

智願の二十五三昧について(一)(若杉)

一心修善不動。及修背捨等不動業。破果報動。真
慧不動破見思動。出仮慧不動破無知動。中道慧不
動如須弥頂。破無明動。修行力故自証三種不動。
慈悲力故。破他三動。故此三昧名為不動三昧。

⑪ 次難伏三昧破三十三天有者。此天居四天之頂。即
是果報難伏。見思難伏無知難伏無明難伏。菩薩為
破其高心。是故修戒定智。破果報難伏。修生滅無
生滅。故破見思難伏。自行力故成三難伏。慈悲力
故破他三難伏。故此三昧名為難伏三昧。

⑫ 次悅意三昧破炎摩天有者。此天虛空無刀杖畏。以
之為悅。實非是悅。未有不動業悅。未有無漏悅。
未有道種智悅。未中有道悅。菩薩為破此故。修四
諦觀八背捨中禪悅。破其動散不悅。生滅無生滅慧
破其有漏不悅。無量慧破其沈空不悅。無作慧破其
二辺不悅。以無生悅故真諦三昧成。出仮稱機之悅
故俗諦三昧成。中道悅意故中道三昧成。自行力故

破諸動。成三昧誓願重機緣惑。以本慈悲令他破四
動。成三不動。是故名不動三昧。委悉如上說。

⑬ 三十三天有。用難伏三昧者。此是地居之頂。即是
果報難伏。見思塵沙無明等難伏。菩薩修諸行出其
上。破諸難伏自成三昧。誓願重他。若有機緣。以
本慈悲令他得証。是故三昧名為難伏。余如上說。

⑭ 焰摩天有。用悅意三昧破者。此天處空無刀杖戰闘。
以之為悅。此果報中悅。而未有不動業悅。亦無無
漏道種智中智等悅。菩薩為破諸不悅。而修諸行。
自成三諦悅意三昧。誓願法界。有機緣者。以本慈
悲令他意悅。是故三昧名為悅意。余如上說。

自証三昧成。以慈悲力故破他三昧成。故名悅意三昧也。

⑬次青色三昧破兜率天有者。此天果報樂青。眼、舌、皆青。菩薩為破此有。故修第一義。非青真見青真。

下非青假見青假。故得中道。見青中道破其青有。義推可知。

⑭次黃色三昧破化樂天有。

⑮次赤色三昧破他化自在天有。類前青色三昧可解。

⑯次白色三昧破初禪有者。初禪離欲界五蓋不善。即是定心善白。但未離見思塵沙無明等黑。菩薩為破是諸黑行故。修三諦白法。破戒之義推之可知。

⑰次種種三昧破梵王有者梵王主三千大千。大千品類

智願の二十五三昧について(若杉)

⑬兜率陀天有。用青色三昧破者。真諦三藏云。此天果報樂青。宮殿服玩等一切皆青。菩薩為破諸青。

下修第一義。非青黃赤白。而見青黃赤白。第一義非戒定慧。而戒定慧。以戒破果報青。以生無生慧破見思青。非真見真。非假見假非中見中。亦復如是。

三青障破自成三諦三青三昧。乃至感成他三昧。

例上可解。

⑭黃色三昧破化樂天有。

⑮赤色三昧破他化自在天有。

⑯白色三昧破初禪有。皆是果報白等。例青色三昧。大意可解。白色三昧者。初禪離五欲為白。未離覺觀故是黑。見思塵沙無明等黑。破此諸黑修諸行白。自成三昧。又成他三昧。如上說。

⑰種種三昧破梵王有者。梵王主領大千界。種類既多。

既多。故有種種之号。為破其種種故修種種空。入種種假。見種種中道。如來藏多所含藏。名種種三昧也。義推可知。

⑩ 次雙照三昧破二禪有者。二禪独有内淨喜兩支故。

受雙名。菩薩為破此雙故。修雙空雙假雙中。雙照二帝。義推可知。

⑪ 次雷音三昧破三禪有者。此禪受樂最為第一。著樂深入如水魚蟄虫。菩薩為破此樂故。用三諦雷音以驚駭。推之可解。

⑫ 次淫雨三昧破四禪有者。四禪如大地具種種芽。若不得雨芽則不生。一切善根。在四禪中。若三諦雨三智善發生也。義推可解知。

⑬ 次如虛空三昧破無想天有者。此是外道天矣。非無想。而計為無想涅槃。如小兒夢尿。菩薩為破是有故。以三諦空破無想。故言如虛空三昧。

⑭ 次照鏡三昧破那含有者。修薰禪隨禪生此。雖得淨

即是果報種種。未見種種空種種假種種中。破此種種修種種行。自成種種亦成他種種。如上說。

⑮ 二禪用雙三昧者。二禪独有内淨喜兩支。余支与余禪共。此即果報雙。而未見雙空雙假雙中。例如上說。

⑯ 三禪用雷音三昧者。此禪樂最深。如水魚蟄虫。是果報著樂。又著空樂假樂中樂。為驚駭諸樂。修諸雷音之行。余如上說。

⑰ 四禪用注雨三昧者。四禪如大地。具種種種子。若不得雨芽不得生。一切善根在四禪中。謂業種三諦種。修諸行雨自生三昧。慈悲心機生他三昧。云。

⑱ 無想天有。用如虛空三昧者。外道非空。妄計涅槃。謂果報非空。三諦皆非虛無。修諸空淨之行。自成化。云。

⑲ 阿那含天。用照鏡三昧。此聖無漏天。雖得淨色。

色。不能知。色如鏡像。菩薩知色如鏡像即空。分別無量依鏡。即見本性中道成。三諦三昧破那含有也。
 次無礙三昧破空処有者。此処得出色籠。顯無礙。
 未是三諦三昧之無礙。見思礙塵沙礙無明等礙。
 菩薩為修三諦三昧破是諸礙。故名無礙三昧。

上
 次常味三破識処有。識相統不斷即無常。菩薩為破此無常。故修數緣常。化用相統常仏性常湛然常破之。

次樂三昧破不用処有者。此不用処如癡。癡故是苦。菩薩用三諦三觀三昧。破得三諦三昧樂。是為樂三昧。

次我三昧破非想天有者。此天最頂計為涅槃真我。菩薩見此猶有細煩惱不自在。即是見思不自在。塵沙不自在。無明不自在。何得是我。為破此我故。修三諦三昧破之。令得無我。隨俗我。八自在我。是故名我三昧。

智顛の二十五三昧(一)(若杉)

但是報。淨色未究尽色空。如鏡未極明。未知色仮如鏡未有影。未知色中如未達鏡円。余如上説。
 空処用無礙三昧者。此定得出色籠。即果報無礙。未是空仮中等無礙。余如上説。

識処用常三昧者。此常謂識相統不斷為常。此乃定報。非三無為常化用常常樂常。例如上。云。

不用処以樂三昧破者。此処如癡。癡故是苦。乃至無明苦。例如上。云。

非想非非想。用我三昧破者。頂天謂是涅槃果報。猶有細煩惱不自在。乃至無明不自在。修行破之。得真我隨俗我常樂我。例如上。云。

⑳二十五有三昧用自除二十五三昧。一有之中悉有三諦三昧。菩薩自修三諦三昧。自除二十五有三諦之惑。以慈悲力。除他二十五有三諦之惑。由是得二十五三昧之名。或從無住之本。用四悉檀立二十五有名如說。

㉑通言三昧名調直定也。真諦三昧以離愛見而為調直。俗諦三昧以稱機為調直。中道三昧以無二邊之曲為調直。是故皆名三昧。若但入空之直不為直。聲聞人得入空非王三昧。若入假亦非究竟。菩薩雖得道種智。亦不名王三昧。以得中道三昧故稱之為王。以二十五三昧。一一皆有中道三昧故。故稱二十五三昧。悉是王三昧。涅槃經云。是二十五三昧名諸三昧王。若入王三昧。一切三昧悉入其中。是故菩薩住不動地。具得此二十五三昧種種力用。須彌高広内於芥子。吞吐出没變通自在。能入地獄不受碎身等苦。若聖行成。能有是事。具如涅槃經說。

㉒此二十五皆稱三昧者。調直定也。真諦以空無漏為調直。出假以稱機為調直。中道遮二邊為調直。故皆具三諦。則通稱三昧。又稱王者。空假調直未得為王。所以二乘入空。菩薩出假不名法王。中道調直故得稱王。一一三昧皆有中道。悉稱為王。大經云。是二十五三昧名諸三昧王。即其位高義。若入是三昧。一切三昧悉入其中。即其体広義。応二十有五有機。即其用長也。無畏地中。具得二十五三昧種種力用。須彌入芥不傷樹木。毛孔納海不燒龜魚。雖処地獄身心無苦。變通出没不動而遠。即其妙義。蓋乃慧聖行成。能有是力也。問三昧破有。乃是涅

三明外用利物者。(以下略)

樂之文。何得積此。答第三云。破有法王出現於世。隨衆生欲而為說法。四意明文宛然具足。又涅槃明菩薩破有。此經明法王破有。彌顯其義也。明聖行竟。

右に見るように両書を掲げ対比した主目的は二十五三味の解説の対比ではあるが、その前文ともいうべき部分について最初考察してみたい。前掲文の書出しの右上に①②等の数字を付したのは前掲文の説明のために付しただけで他意はない。以下①②等の順に従って検討を加える。

① 前述のように『四教義』は別教の初地に入るために二十五有を破すべきことを述べた後、①の文に見るように、一明得二十五三味聖行成。二明梵行。三明天行。四明嬰兒行。五明病行。と五行の名を列ね、一明得二十五三味聖行成を一積二十五三味名。二正修二十五三味成。三外用利物の三意に分け、更に一積二十五三味名を一隨時趣立名。二隨便立名。三隨對治立名。四隨理立名。と四類によって二十五三味の名目を説明している。二正修二十五三味成については一一の三味の中に、一出諸有行業惑障。二用三味治破。三結成三味。四慈悲破有。の四意があるとし、この四意によって、二十五の三味を説明するというのであるが、実際には二十五三味のすべてではなく、説明を省略している処も多い。

一方、『法華玄義』の慧聖行を説く第三段では「積二十五三味名」と「通積二十五」の二つに大別するのみで、『四教義』でいう三外用利物に相当する箇処は見当らない。随って右の両書の対比においても、『四教義』の三外用利物の段は省略した。「積二十五三味名」は、一隨時趣立。二隨其義便。三隨事對當。四理實無名而依理立。の四意

智願の二十五三味について(一)(若杉)

に分けるが、これは『四教義』とほぼ同じ内容である。「通釈二十五」では、一出諸有過患。二明本法功德。三結行成三昧。四慈悲破有の四意によって釈するという。一明本法功德は「四教義」の二用三昧治破に相当する訳であるが、表現が変わっている。但し、その内容においては次節の②の無垢三昧において直ちに知られるように大差はない。『四教義』のように、梵行等の四行の名目を掲げないのは、約教の増敷行を明す段で、

復次約三五教二明三行妙二者。又為二。先明二別五行。次明二円五行。別者。如二涅槃云。五種之行。謂聖行梵行天行嬰兒行病行。⁽²⁾(以下略)

と既に述べているからである。この節は全体を通読して知られるように、『法華玄義』は『四教義』を要約したものであろう。

② ここから二十五三昧を述べ、二十五有を破することを説明するのであるが、先に大涅槃經(南本)卷第十三 聖行品の文について述べると

善男子。得_レ無垢三昧_レ能壞_二地獄有_一。得_レ無退三昧_レ能壞_二畜生有_一。得_レ心樂三昧_レ能壞_二餓鬼有_一。⁽³⁾(以下略)

とあって、『四教義』の「明_二無垢三昧_レ破_二地獄有_一」「明_二不退_レ(經文は無退)三昧_レ破_二畜生有_一」等と述べている方が、『法華玄義』の「地獄有用_二無垢三昧_レ破_一」「畜生有用_二不退三昧_レ」等と記述するより經文に近い表現である。以下の二十三三昧についても同様であるから、この点については再び述べない。

この無垢三昧を説くに当り、『四教義』は「即為_二四意_一」として、「一明_二業結_一」「二明_二下用三昧_レ破_二無明_一」「三明_二結_二成三昧_一」「四明_二慈悲利物_一」と前節末尾の四意の項目を少しく変えて挙げ、又この節の末に「因_レ此_二下具_二此四意_一類_レ前可_レ知」と記しているのに対し、『法華玄義』は各項の終りに「其一」「其二」「其三」と記し、「其四」

はなく「下去例如_レ此不_二復委記_一也」と最後を結び、四意の項目は省略している。両者を比較してみるに、一・二の用語の相違はあるにしても、『法華玄義』は『四教義』を踏襲し、要約している如く感ぜられるが、『四教義』は「衆生有_レ機関_二於慈悲_一」と説き、その「機」については何ら述べる所がないが、『法華玄義』は「機」を「善機」「入空機」「入仮之機」「入中機」と四分し、その各各に「離_レ苦得_レ楽」「令_レ得_二真諦_一」「令_レ得_二俗諦_一」「令_レ得_二王三昧_一」と得果の相違を述べている。この点、両者の大きく異なる所を見るのである。

③ 不退三昧について見るに、前の無垢三昧と同じように大きな相違点はないものの、『四教義』に「修_二戒忍_一」「修_レ定」とあるのが、『法華玄義』では「修_三前持_二」「修_三於禪定_一」となり、『四教義』では「位不退三昧成」「行不退三昧成」「念不退三昧成」「自_以修行力_二破_三三種退_一。成_三不退_一。自得_三諦三昧_一」とあって、「三諦三昧」の説明はないが、『法華玄義』は「得_二位不退_一。真諦三昧成」。「得_二行不退_一。俗諦三昧成」。「得_二念不退_一。中道三昧成。」と記述されているので、『四教義』に比べて、『法華玄義』の方が理解し得い。又『法華玄義』は前節と同様に「機」を「善機」「入空機」「入仮機」「入中機」と四機に分け、その得果等を細かく説明している。

④ 心楽三昧においても、二・三の文字の相違はあっても、大体において同じ内容といえようが、前の諸三昧と同様、『法華玄義』は「機」を四分しているので、四慈悲破有の節が変っている。

⑤ 歡喜三昧においても、前の諸三昧と同様に「機」を四分する四慈悲破有の節のみ大きく相違する。

⑥ 日光三昧においても、前の諸三昧と同じく「機」を四分している。『四教義』は「破_三惡業迷闇_一」というのみであるが、『法華玄義』は「東天下人有_二惡業闇_一」といって、「東天下人」の一句を加えているので、文意が明瞭となり、それに続く節も理解し易くなっている。

① 月光三昧は短文であるので、比較し難いが、両者はほぼ同じ内容といつてよいであろう。
 ② 熱焰三昧においても、四慈悲破有の節が大きく変り、その他は大きな相違はないが、『四教義』の「若得真人空智焰」。破「性人我惑」。真諦三昧成。」等の句を『法華玄義』が「得」人空」。成「真諦智焰」等と書き替えて、要略している点が特に目立つといえよう。

③ 如幻三昧において、『四教義』は「菩薩為破是諸幻」。故修三種三昧」と説くが、『法華玄義』は「故修三種三昧」の字句を除くと共に、「從於持戒幻出無作。破結業幻」。從於禪定幻出背捨」と持戒と禪定を加え、『四教義』では「修真諦三昧幻出無漏」。破見思之幻」。修俗諦三昧幻出道種智。破無知之幻」。修中道三昧幻出一切種智」。破無明之幻」。と、無漏・道種智、一切種智を挙げているのに対し、『法華玄義』では「從生無生慧幻出無漏。從無量慧幻出有漏。從無作慧幻出非漏非無漏」。と「無漏・有漏・非漏非無漏」と用語を統一していることが知られる。しかし、両者はほぼ同じ内容である。

④ 不動三昧で、両者を比べてみて、第一に『四教義』は三種の不動について述べているのに対し、『法華玄義』はこれについては何も説かないで、「成三不動」といい、第二に『四教義』は果報・見思・無智(正しくは無知)・無明の四動を挙げているにも拘らず、結びで「破他三動」というのに対し、『法華玄義』は「令他破四動」といっていて、『法華玄義』の記述の方が正しい。しかし、全体を通読してみると、『法華玄義』の記述は『四教義』に負うものであろう。

⑤ 難伏三昧において、『四教義』は「破果報難伏」。修生滅無生滅」。故破見思難伏」。とだけ述べ、前例の如くであれば、恐らく無量・無作等についても記述したのであるが、之を略している。『法華玄義』は「破諸難伏」。

自成三昧。」と述べて、「修三滅無生滅。故破見思難伏。」という『四教義』の文を「自成三昧」と更に要約している。全体について見るに、『法華玄義』は『四教義』の文を要約し、「誓願熏他。若有機緣。以本慈悲。令他得証」の文を加えたものであろう。次の⑩ 悦意三昧について同様のことがいえる。

⑫ 悦意三昧では『四教義』の「実非是悦」及び「無漏」「道種智」「中道悦」の文を『法華玄義』では「果報中悦」「無漏」「道種智」「中智悦」に改め、統一を図ったようである。その他についても、『法華玄義』は⑪ 難伏三昧の記述のように省略している。『四教義』はここで初めて「義推可解」と文節の末尾に加えているが、『法華玄義』はすでに⑨⑪⑫に見られるように「余如上説」とか「委悉如上説」⑩とか、或は「例上可解」⑫等と記載している。

⑬ 青色三昧においては『四教義』は「修第一義」に続けて「非青真見青真」「非青假見青假」と述べ、「故得中道」とし、更に「見青中道破其有」と記するに留まり「修第一義」については何の説明も加えていないのに対し、『法華玄義』は「修第一義」を「非青黄赤白」。而見青黄赤白。第一義非戒定慧。而戒定慧。」と説き、更に「以戒破果報青。」と述べ、以下真・假・中の三諦により、三青の障を破することを明し、『四教義』よりもその記述は整っている。なお、『法華玄義』において、「非青黄赤白」と青以外に黄・赤・皇白を加えたのは次の黄色・赤色・白色三昧についての説明をも含めたからであらう。このことは⑩ 白色三昧において「例青色三昧」とあることによっても知られる。全体として見るに、『四教義』を基に、『法華玄義』は戒と真・假・中の三諦によって敷衍したものであろう。

⑭ 黄色三昧は両者同一文である。

智顛の二十五三昧について(一)(若杉)

⑮ 赤色三昧も両者はば同一文であり、『四教義』の「類前青色三昧可解」の文は前述の⑮青色三昧を指しているのは明かであるから、『法華玄義』では省略したのであろう。

⑯ 白色三昧においては、「四教義」が「初禪離欲界五蓋不善」。即是定心善白。」と説くのを『法華玄義』は「初禪離五欲為白。」と要約し、初禪ではまだ覚観(新訳は尋伺)を離れていないので、「未離覚観故是黒」と覚観についても書き加えているのである。全体として、『四教義』と『法華玄義』はほぼ同一内容といえよう。

⑰ 種種三昧において、両者の内容はほぼ同一であるといってもよいが、『四教義』では「如来蔵多所合蔵。」といい、如来蔵によせて、「種種」の語を説明しようとしているが、『法華玄義』ではこの語句を除いている。恐らくは『四教義』のこの文を繁重と見たからであらうか。

⑱ 雙三昧では『法華玄義』は⑱ 雷音三昧⑳ 淫雨三昧と共に、従来例からすれば、「二禪有用雙三昧破者」とあるべきものを、「二禪用雙三昧者」と略している。又因みに『四教義』は「雙照三昧」と記しているが、『涅槃經』の文は「雙三昧」である。『四教義』は「修雙空雙仮雙中」と述べているが、『法華玄義』は「未見雙空雙仮雙中」という。その趣旨は同じであらう。両者の内容はほぼ同一である。

㉑ 雷音三昧では『法華玄義』は「四教義」の要約であることは一読して知られよう。

㉒ 淫(涅槃經)及び『法華玄義』では注(雨三昧では、『四教義』は「四禪如大地。具種種芽。」といい、続いて「若不_レ得_レ雨芽則不生。」というのであるが、これは『法華玄義』のように、「具種種種子」というのが当然であろう。もし、『四教義』のように「種種芽」というのであれば、それに続く文章では「芽則_レ不_レ育」等というべきであらう。又『法華玄義』は「謂業種三諦種」と述べ、『四教義』では記述していない「業種」を加えている。

しかし、行文等では『四教義』と『法華玄義』は同一である。

⑳ 虚空三昧においては、『四教義』は「外道天実非_レ無想」。而計為_レ無想涅槃。如_レ小兒夢尿。」と述べるに對し、『法華玄義』は「外道非_レ空計_レ涅槃」。謂果報非_レ空」と述べ、「非_レ無想」を「非_レ空」と言い替え、又『四教義』の「以_レ三諦空破_レ無想」を『法華玄義』は「三諦皆非_レ虛無」。修_レ諸空淨之行。」と表現しているが、その意味する内容は同一であろう。『法華玄義』は『四教義』に比べて、明確さを増している。

㉑ 照鏡三昧では、『四教義』は阿那含天に生ずる所以は「修_レ薰禪。隨_レ禪生_レ此」であるとし、直ちに「雖_レ得_レ淨色。」と続けて、阿那含天と淨色との關係については説いていないが、『法華玄義』は「此(阿那含)聖無漏天」と述べ、聖無漏なるが故に淨色であることを示している。又、『四教義』は「雖_レ得_レ淨色」。不能_レ知_レ色如_レ鏡像」等という。即ち阿那含天はまだ色は鏡中の像の如く空であることを知らないが、菩薩は色は鏡中の像の如く空であることを知り、無量の像は鏡によって存在すると分別し、色の本性は中道であることを見ると述べている。

しかし、「分_レ別無量依_レ鏡」と説くのは色仮を述べようとしているのであろうが、これだけでは色の仮を説くのに充分でないと考えたのであろうか、『法華玄義』では「淨色未_レ究_レ尽色空」といい、続けて、「雖_レ得_レ淨色」。但是報。」と淨色も亦果報であることを明かし、鏡の「未_レ極明」と、鏡の「未_レ有_レ影」と、「未_レ達_レ鏡円」によって、色の空と仮と中を説く。鏡を譬喩の手段とすることは兩者同じであるが、『法華玄義』の説示は『四教義』より勝れている。

㉒ 無礙三昧では『法華玄義』は『四教義』を要約したもののようである。

㉓ 常三昧においては、『四教義』は「識_レ有」の「識」を説明して、「識相統_レ不_レ断即無常」と識の無常なることを

述べ、数縁の常、化用相統の常、仏性の常、湛然の常を修することにより、識処の無常を破すというのに対し、『法華玄義』は「識相統不断為常」と述べ、一見『四教義』の表現と矛盾するようであるが、『四教義』のように、相統不断が無常であると言うなら、なぜ相統するものが無常であるか説明を要する所であろう。それ故『法華玄義』は一応、相統不断は常であると述べ、更に「此乃定報」と説き、この常は識処の定報なるが故に、三無為の常・化用の常・常楽の常ではない、即ち真の常ではないことを明し、だからこそ常三昧によって識処有を破すと説明している。『法華玄義』は『四教義』によっているものの、『四教義』より遙かに理解し易くなっている。

②⑤ 楽三昧では『法華玄義』は『四教義』の解説を踏襲し乍らも、『四教義』の「菩薩用三諦」以下の後半の節を省略している。

②⑥ 我三昧では『四教義』の「猶有_二細煩惱不自在_一。即是見思不自在。塵沙不自在。無明不自在。」の文を『法華玄義』は「猶_二有細煩惱不自在_一。乃至無明不自在。」と要約しているのが目立つ。又、『四教義』の「無我」を『法華玄義』では「真我」と表現している。これはこの場合、無我といえは、三蔵教の無我と同一視される混乱を避けるため、わざわざ表現を変えたのであろう。この節も『法華玄義』が『四教義』の要約であることは説くまでもないであろう。

②⑦ この節は『法華玄義』に対応する箇所がない。『法華玄義』は今更述べる必要がないと考えたからであろうか。

②⑧ 『四教義』の「通言三昧」……(中略)……能有_二是事_一。の文は『法華玄義』の「此二十五皆称三昧_一者。……(中略)……能有_二是力_一。」の文とよく応対しているが、『法華玄義』の方が文章として遙かに勝れていることが知られる。『法華玄義』の「問三昧破_レ有……(中略)……弥顯_二其義_一也」の文は『法華経』の玄義なるが故に附加

された問答料簡であることはいうまでもない。

以上『法華玄義』と『四教義』の二十五有を説く段を比較対照し、検討を加えてみたのであるが、『法華玄義』を中心としていえば、その殆んどが『四教義』の要約或は踏襲といつてよいであろう。しかし、『法華玄義』を詳細に検討すると⑳ 淫雨三昧のように『四教義』の文を訂正したり、或は㉑ 青色三昧のように敷衍したり、又は㉒ 常三昧の如く理解し易い表現になったりする箇所も少なからずは存在する。にも拘らず特に注目に価するのは㉓ 無垢三昧 ㉔ 不退三昧 ㉕ 心楽三昧 ㉖ 歡喜三昧 ㉗ 日光三昧 ㉘ 熱焰三昧に見られる「機」についての説明である。『四教義』においては「機」の説明が殆どないのに、『法華玄義』は「機」を「四機」に分けて執拗なまでに繰返してその得果と共に説示しているのである。この点において『法華玄義』の筆録者の意図が奈辺にあるか窺うことができよう。(未完)

〔註〕

- (1) 佐藤哲英著『天台大師の研究』(百華苑・昭和三十六年刊)三二六頁以下。
- (2) 大正藏 三十三・七二六・下。
- (3) 大正藏 十二・六九〇・中。

附記

- 1 本稿は昭和六十一年九月二十九日、第三十九回、日蓮宗教学大会(会場 立正大学)における発表を文章化したものである。
- 2 紙数の制限のため、以下は次の機会に譲る。

智頭の二十五三昧について(一)(若杉)